

実盛

世阿弥作

前

ワキ 某上人

ワキヅレ 隨行僧

シテ 老人

後

ワキ 前に同じ

ワキヅレ 前に同じ

シテ 斎藤別当実盛

地は 越前

季は 春

ワキサシ

「それ西方は十万億土。遠く生るゝ道ながら。こゝ
も己心の弥陀の国。貴賤群集の称名の声。

ツレ 「日々夜々の法の場。

ワキ 「げにも誠に攝取不捨の。

ツレ 「ちかひに誰か。

ワキ 「残るべき。

二人歌 「独なほ。仏の御名を尋ね見ん。く。おのく帰
る法の場。知るも知らぬも心ひく。誓ひの網に漏

るべきや。知る人も。知らぬ人をも渡さばや。彼
国へゆく法の船。浮ぶも安き道とかや。く。

シテサシ 「笙歌遙に聞ゆ孤雲の上。聖衆来迎す落日の前。あ
ら尊とや今日も又紫雲の立つて候ふぞや。

詞 「鐘の音念佛の声の聞え候。さては聴聞も今なるべ
し。さなきだに立居くるしき老の波の。よりもつ
かずは法の場に。よそながらもや聴聞せん。一念
称名の声の内には。攝取の光明曇らねども。老眼

の通路なほ以て明かならず。よしく少しば遅く
とも。こゝを去る事遠かるまじや。南無阿弥陀仏。

「いかに翁。さても毎日の称名に怠る事なし。され
ば志の者と見る所に。お事の姿余人の見る事なし。
誰に向つて何事を申すぞと皆人不審しあへり。今
日は御事の名をなのり候へ。

シテ詞
「是は思ひもよらぬ仰せかな。もとより所は天ざか
る。鄙人なれば人がましやな。名もあらばこそ名

のりもせめ。只上人の御下向。ひとへに弥陀の來
迎なれば。かしこうぞ長生して。此称名の時節に
あふ事。盲龜の浮木優曇華の。花待ち得たる心地
して。老の幸身に越え。悦びの涙袂に余る。され
ば此身ながら。安樂国に生るゝかと。無比の歡喜
をなす所に。輪廻妄執の閻浮の名を。又あらため
て名のらん事。口惜しうこそ候へとよ。

ワキ
「げにく翁の申す所ことわり至極せりさりなが

ら。ひとつは懺悔の廻心ともなるべし。たゞ御事

が名を名のり候へ。

シテ 「さては名のらでは叶ひ候ふまじきか。

ワキ 「中々のこと急いで名のり候へ。

シテ 「さらば御前なる人をのけられ候へ。近う参りて名のり候ふべし。

ワキ 「もとより翁の姿余人の見る事はなけれども。所望ならば人をばのくべし。近うよりて名のり候へ。

シテ 「昔し長井の斎藤別当実盛は。此篠原の合戦に討たれぬ。聞しめし及ばれてこそ候ふらぬ。

ワキ 「それは平家の侍。弓取つての名将。其軍物語は無益。唯御事の名を名のり候へ。

シテ 「いやさればこそ其実盛は。此御前なる池水にて鬚鬚をも洗はれしとなり。さればその執心残りけるか。今も此あたりの人には幻の如く見ゆると申し候。

ワキ 「さて今も人に見え候ふか。

シテ 「深山木の其梢とは見えざりし。桜は花に顯はれたる。老木をそれと御覧ぜよ。

ワキ 「不思議やさては実盛の。昔を聞つる物語。人の上ぞと思ひしに。身の上なりける不思議さよ。さては御事は実盛の。其幽靈にてましますか。

シテ 「われ実盛が幽靈なるが。魂は冥途にありながら。魄は此世にとゞまりて。

ワキ 「なほ執心の闇浮の世に。

シテ 詞 「二百余歳の程は経れども。

ワキ 「浮びもやらで篠原の。

シテ 「池のあだ波夜となく。

ワキ 「昼とも分かで心の闇の。

シテ 「夢ともなく。

ワキ 「現ともなき。

シテ 「思ひをのみ。

歌

「篠原の。草葉の霜の翁さび。

地

「草葉の霜の翁さび。人な咎めそ仮初に。あらはれ
出でたる実盛が。名を洩し給ふなよ。亡き世語も
恥かしとて。御前を立ち去りて。行くかと見れば
篠原の。池の辺にて姿は。まぼろしと為りて失せ
にけり。／＼。（中入）

ワキ 「いざや別時の称名にて。彼幽靈を弔はんと。

歌 ワキ、ヅレ 「篠原の。池のほとりの法の水。／＼。ふかくぞ頼

む称名の。声すみわたる弔ひの。初夜より後夜に
至るまで。心も西へ行く月の。光と共に曇りなき。
鐘を鳴らして夜もすがら。

ワキ 「南無阿弥陀仏なむあみだぶ。

後ジテ

「極樂世界に行きぬれば。長く苦界を越え過ぎて。
輪廻の故郷隔たりぬ。歡喜の心いくばくぞや。処
は不退のところ。命は無量寿仏となふ。頼もしや
念々相続する人は。

地 「念々ごとに往生す。

シテ 「南無と言つぱ。

地 「即是帰命。

シテ 「阿弥陀と言つぱ。

地 「其行此義を以ての故に。

シテ 「必ず往生を得べしとなり。

地 「ありがたや。

ワキ 「不思議やな白みあひたる池の面に。幽に浮び寄る

者を。見ればありつる翁なるが。甲冑を帶する不思議さよ。

シテ 「埋木の人知れぬ身と沈めども。心の池の言ひがたき。修羅の苦患の数々を。浮べて給ばせ給へとよ。

ワキ 「是ほどに目あたりなる姿言葉を。余人は更に見も聞きもせで。

シテ 詞 「唯上人のみ明らかに。

ワキ 「見るや姿も残の雪の。

シテ
「鬚鬚白き老武者なれども。

ワキ
「其出立は花やかなる。

シテ
「粧ひ殊に曇りなき。

ワキ
「月の光。

シテ
「ともし火の影。

地
「闇からぬ。夜の錦の直垂に。く。萌黄にほひの
鎧着て。黄金作の太刀かたな。今の身にてはそれ
とても。何か宝の池の蓮の。台こそ宝なるべけれ。

シテクリ
「げにや疑はぬ。法の教へは朽ちもせぬ。黄金の言
葉多くせば。などかは至らざるべき。く。

シテクリ
「それ一念弥陀仏即滅無量罪。

地
シテサシ
「すなはち廻向發願心。心を残す事なけれ。
時至つて今宵逢ひ難き御法を受け。

地
シテサシ
「慙愧懺悔の物語。猶も昔を忘れかねて。忍ぶに似
たる篠原の。草の陰野の露と消えし。有様かたり
申すべし。

「さても篠原の合戦破れしかば。源氏の方に手塚の太郎光盛。木曾殿の御前に参りて申すやう。光盛こそ奇異の曲者と組んで首取つて候へ。大将かと見ればつゞく勢もなし。又侍かと思へば錦の直垂を着たり。名のれくと責むれども終に名のらず。

声は坂東声にて候ふと申す。木曾殿。天晴長井の斎藤別当実盛にてやあるらん。然らば鬢鬚の白髪たるべきが。黒きこそ不審なれ。樋口の次郎は見

知りたるらんとて召されしかば。樋口参り唯一目見て。涙をはらくと流いて。あなむざんやな。

斎藤別當にて候ひけるぞや。実盛つねに申し、は。

六十に余つて軍をせば。若殿原と争ひて。先をかけんも大人気なし。又老武者とて人々に。あなづられんも口惜しかるべし。鬢鬚を墨に染め。若やぎ討死すべきよし。常々申し候ひしが。誠に染みて候。洗はせて御覽候へと。申しもあへず首を持

ち。

「御前を立つてあたりなる。此池波の岸に臨みて。

水の緑も影うつる。柳の糸の枝たれて。

歌

「氣晴ては。風新柳の髪を梳り。氷消ては波旧
苔の。鬚を洗ひて見れば。墨は流れ落ちて。もと
の白髪と為りにけり。げに名を惜しむ弓取は。誰
もかくこそ有るべけれや。あらやさしやとて。皆
感涙をぞ流しける。

クセ

「又実盛が。錦の直垂を着る事。私ならぬ望なり。
実盛都を出でし時。宗盛公に申すやう。故郷へは
錦を着て。帰るといへる本文あり。実盛生国は。
越前の者にて候ひしが。近年御領に附けられて。
武藏の長井に。居住仕り候ひき。此度北国に。罷
り下りて候はゞ。定めて討死仕るべし。老後の思
出これに過ぎじ。御免あれと望みしかば。赤地の
錦の。直垂を下し賜はりぬ。

シテ
「然れば古歌にもゝみぢ葉を。

地
「分けつゝ行けば錦着て。家に帰ると。人や見るら
んとよみしも。此本文の心なり。されば古への朱
買臣は。錦の袂を。会稽山に翻へし。今の実盛は。
名を北国の街に揚げ。かくれなかりし弓取の。名
は末代に有明の。月の夜すがら。懺悔物語申さん。
ロンギ地
「げにや懺悔の物語。心の水の底清く。濁を残し給
ふなよ。

シテ
「其執心の修羅の道。めぐりくゝて又こゝに。木曾
と組まんとたくみしを。手塚めに隔てられし。無
念は今にあり。

地
「つゞく兵誰々と。名のる中にも先すゝむ。

シテ
「手塚の太郎光盛。

地
「郎等は主を討たせじと。

シテ
「かけ隔たりて実盛と。

地
「押し並べて組む所を。

シテ
「あつばれおのれは。日本一の剛の者と。くんでう
づよとて。鞍の前輪に押しつけて。首かき切つて
捨てゝけり。

地
「其後手塚の太郎。実盛が弓手にまはりて。草摺を
畳みあげて。二刀さす所を。むずと組んで二疋が
間に。どうと落ちけるが。

シテ
「老武者の悲しさは。

地
「軍には為疲れたり。風にちゞめる枯木の力も折れ
て。手塚が下になる所を。郎等は落ちあひて。終
に首をば掻き落されて。篠原の土と為つて。影も
形もなき跡の。影も形も南無阿弥陀仏。弔ひてた
び給へ。跡弔ひてたび給へ。